

「学びに向かう力・人間性」を育てる総合的な学習の時間の指導法の研究
～「職場体験学習を核としたキャリア教育プログラム」の開発と実践を通して～

延岡市立北方学園中学校
教諭 加藤 恭子

目 次

I 研究主題	3-1
II 主題設定の理由	3-1
III 研究目標	3-1
IV 研究仮説	3-1
V 研究内容	3-2
VI 研究計画	3-2
VII 研究構想	3-3
VIII 研究の実際	3-4
1 理論研究	3-4
(1) 本研究で育成を目指す資質・能力	3-4
(2) 「発見型職場体験学習プログラム」の開発	3-5
2 実践研究	3-9
(1) 「発見型職場体験学習プログラム」の実践	3-9
(2) 考察	3-14
IX 研究の成果と今後の課題	3-20
1 研究の成果	3-20
2 今後の課題	3-20
参考・引用文献等	3-20

I 研究主題

「学びに向かう力・人間性」を育てる総合的な学習の時間の指導法の研究
～「職場体験学習を核としたキャリア教育プログラム」の開発と実践を通して～

II 主題設定の理由

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会が急速に変化し、予測が困難な時代となっており、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決できるようになる力の育成などが求められている。中学校学習指導要領（平成29年3月告示）は、子供たちに求められる資質・能力を、社会と連携・協働しながら育む「社会に開かれた教育課程」の理念のもと改訂された。キャリア教育については、中央教育審議会（平成28年12月答申）における「職場体験活動のみをもってキャリア教育を行ったものとしているのではないか。」等の課題を受け、学ぶことと自己の将来のつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しながら充実を図ることと謳われている。つまり、キャリア教育の役割はこれまで以上に大きくなっており、本県においても、「第二次宮崎県教育振興基本計画（平成27年9月改定）」の施策の柱の一つとして位置付けられている。

このような中、所属校では「自立した人間を育てる」を重点目標の一つとして掲げ、総合的な学習の時間において、地域と連携した地場産業体験学習や職場体験学習、地域イベントへの参画等を行い、ふるさと教育をベースとしたキャリア教育に取り組んできた。しかし、年度始めに2年生に行ったアンケートから、生徒の実態として、「仲間と協力して作業はできるが、何かを生み出す創造性に乏しく、自ら課題解決に取り組むことが苦手である」ことに課題が見られることが分かった。このことは、「本校のキャリア教育に改善すべき点があること」、そして、その改善を通して、特に「学びに向かう力・人間性を育成する必要があること」を示唆していると言える。とりわけ職場体験学習については、育成すべき資質・能力や事前・事後指導の内容が曖昧であると考えた。

そこで、宮崎県キャリア教育支援センターと連携し、総合的な学習の時間における「職場体験学習を核としたキャリア教育プログラム」として、仕事の体験だけでなく企業の魅力（社員や職務の価値等）を発見する「発見型職場体験学習プログラム」を新たに開発・実践したいと考えた。そして、このプログラムにより、一人一人の生徒の「学びに向かう力・人間性」育成に迫りたいと考え、本主題を設定した。

III 研究目標

総合的な学習の時間において、「学びに向かう力・人間性」を育てるための、「職場体験学習を核としたキャリア教育プログラム」の開発と実践を通して、その有効性を検証する。

IV 研究仮説

総合的な学習の時間に行う職場体験学習において、仕事の体験だけでなく企業の魅力（社員や職務の価値等）を発見する「発見型職場体験学習プログラム」を開発し、実践すれば、一人一人の生徒の「学びに向かう力・人間性」を育てることができるだろう。

V 研究内容

1 理論研究

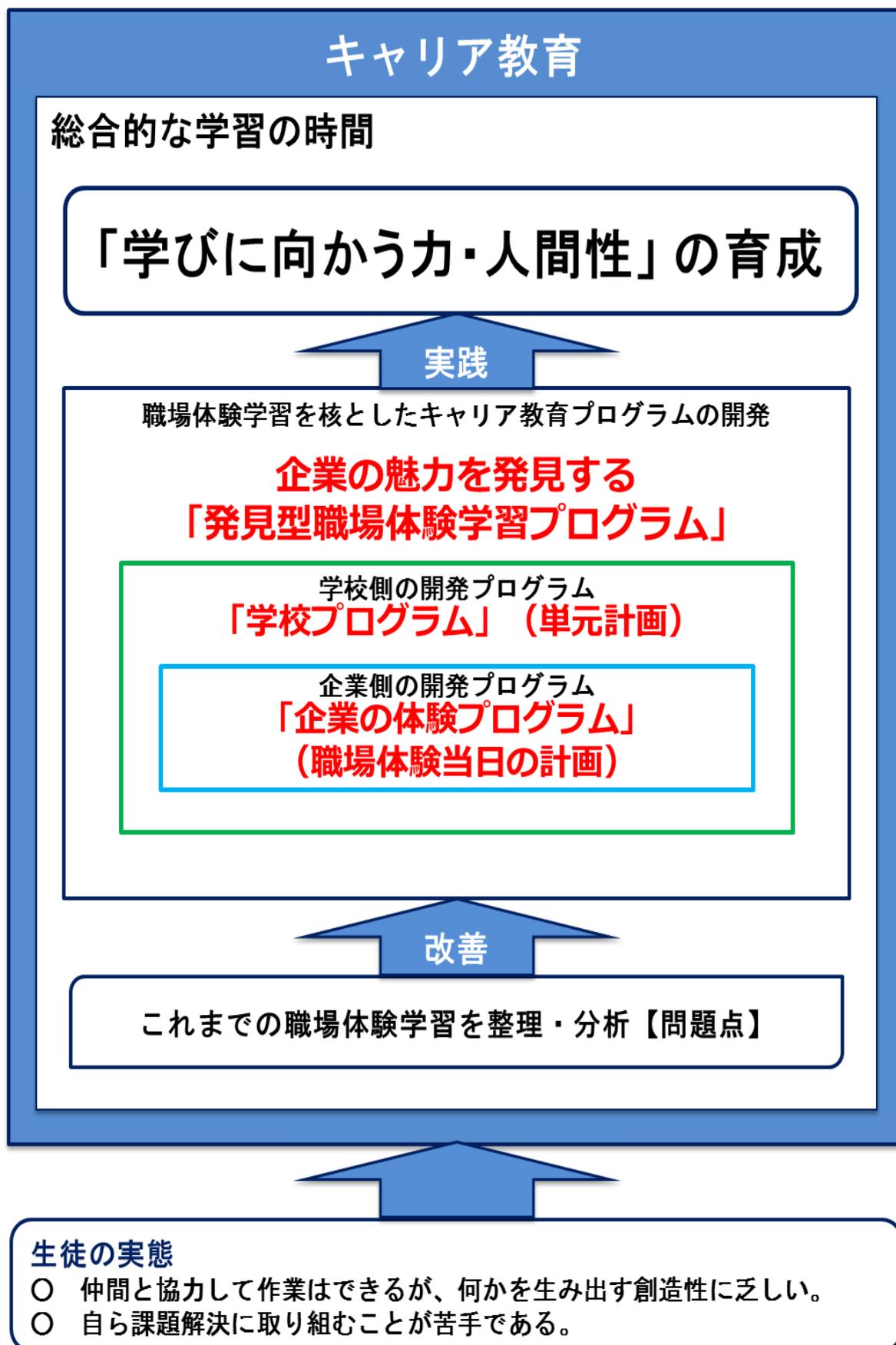
- (1) 本研究で育成を目指す資質・能力
- (2) 「発見型職場体験学習プログラム」の開発

2 実践研究

- (1) 「発見型職場体験学習プログラム」の実践
- (2) 考察

VI 研究計画

月	研究内容	研究事項	研究方法
4	○ 研究の方向性	○ 研究主題・副題・仮説等の設定	○ 文献研究
5	8日：課長ヒア ○ 研究の方向性 ○ 理論研究	○ 研究内容・研究計画の設定 ○ 理論の構築	○ 文献研究 ○ 実態調査
6	29日：前期協議会 ○ 検証授業Ⅰの構想・準備	○ 理論の構築 ○ 前期協議会の資料作成 ○ 検証授業Ⅰの学習指導案の内容 検討及び準備	○ 文献研究
7	○ 検証授業Ⅰの実施	○ 協議会後の資料の修正 ○ 検証授業Ⅰの実施と分析	○ 授業実践
8	○ 検証授業Ⅱの構想・準備	○ 検証授業Ⅱの学習指導案の内容 検討及び準備	○ 文献研究
9	○ 検証授業Ⅱの実施	○ 検証授業Ⅱの実施と分析	○ 授業実践
10	○ 実態調査の分析	○ 調査内容の分析	○ 文献研究
11	○ 研究のまとめ	○ 後期協議会の資料作成	○ 文献研究
12	10日：後期協議会	○ 後期協議会の資料作成	○ 文献研究
1	○ 研究のまとめ	○ 協議会後の資料の修正 ○ 研究報告書の作成	
2	○ 研究のまとめ	○ 研究発表会の資料作成 ○ パネルの作成	
3	12日：主題研究発表会	○ 研究発表会の資料作成	



Ⅷ 研究の実際

1 理論研究

(1) 本研究で育成を目指す資質・能力

ア 総合的な学習の時間の目標及び内容

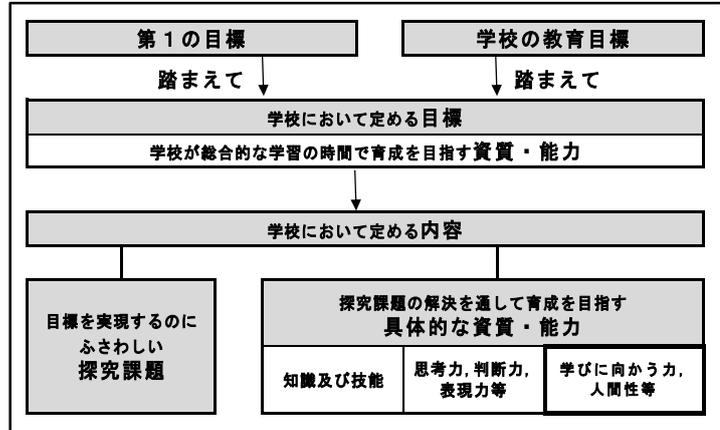
学習指導要領では、総合的な学習の時間の目標構造が

【図1】のように示されている。そこで、本研究の対象校における学校において定める内容を【表1】のように設定した。

なお、本研究では、「学びに向かう力・人間性」を高めていくことが、学校の教育目標にもつながっていくと考え

られるので、育成を目指す資質・能力を「学びに向かう力・人間性」に焦点化し、進めることにする。

【図1 総合的な学習の時間の目標構造】



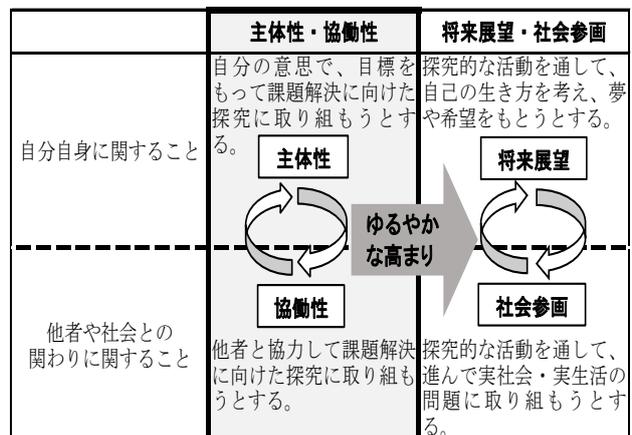
【表1 学校において定める内容（本研究の対象校）】

探究課題	働くことの意味や働く人の夢や願い	
育てたい 資質・能力	知識及び技能	学ぶことや働くことの意味を考え、学校での学びが自分の将来につながっていることを理解する。
	思考力, 判断力, 表現力等	よのなか教室や職場体験などの体験活動を通して、課題を設定し、収集した情報を取捨選択し、視点を決めて分析する力や論理的にまとめる力を身に付ける。
	学びに向かう力, 人間性等	自分の意思で目標をもって、他者と協力して、課題解決に向けた探究に取り組もうとする。また、自己の生き方を考え、進んで実生活の問題にも取り組もうとする。
単元名	職場体験学習を通して、将来社会で活躍するために必要な力を探究しよう。	

イ 「学びに向かう力・人間性」とは

「学びに向かう力・人間性」は、自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方の視点を踏まえ、それに関わる心情や態度と捉える。【図2】のように、両方のバランスをとり、関係を意識する。本研究では、特に、「主体性」と「協働性」を育成し、「将来展望」と「社会参画」においても、ゆるやかな高まりを目指していくこととする。

【図2 「学びに向かう力・人間性」】



ウ キャリア教育との関連について

キャリア教育については、以下のように中学校学習指導要領に示されている。

生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力（＝「基礎的・汎用的能力」）を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。

そこで、「基礎的・汎用的能力」を【表2】のように焦点化し、本研究で育成を目指す資質・能力「学びに向かう力・人間性」との整合性を図ることとした。

【表2 焦点化した「基礎的・汎用的能力」】

基礎的・汎用的能力		研究との関連
人間関係形成・社会形成能力	○ 自分から役割を見付け、周囲と力を合わせて行動できる。	協働性
自己理解・自己管理能力	○ 自分の長所を把握しようとすることができる。	主体性
自己理解・自己管理能力	○ 不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとすることができる。	主体性

そして、総合的な学習の時間で「学びに向かう力・人間性」を育成すれば、キャリア教育で目指す、この焦点化した「基礎的・汎用的能力」の育成につながると考えた。

また、キャリア教育は、特別活動を要として行うことになっているが、本研究では、本校が、職場体験学習を実施している総合的な学習の時間で進めることとし、特別活動の本質である「実践」につながる研究とする。

(2) 「発見型職場体験学習プログラム」の開発

ア 「発見型職場体験学習プログラム」開発の意義

国立教育政策研究所から出された【表3】によると、宮崎県の実施率はほぼ100%で、総合的な学習の時間で実施する学校は85.6%である。この結果からも、総合的な学習の時間に行う本プログラムの開発は、宮崎県の学校においても汎用性があると考えられる。

【表3 平成28年度職場体験実施状況等調査結果】

○ 職場体験の実施状況			
	学校数	実施学校数	実施率
宮崎県	133校	132校	99.2%
○ 職場体験の教育課程での位置づけの状況			
教科の授業で実施			2.4%
総合的な学習の時間で実施			77.7%
特別活動で実施			8.2%
総合的な学習の時間で実施し 特別活動の学校行事で読み換え			7.9%
教育課程には位置づけずに実施			3.9%

【表4 平成28年度職場体験実施状況等調査結果】

事前指導にかける時間						
学年	指導時間					
	0時間	1～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	21時間以上
主たる学年	3.3%	23.6%	46.1%	19.3%	5.6%	2.1%
事後指導にかける時間						
学年	指導時間					
	0時間	1～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	21時間以上
主たる学年	2.4%	56.0%	34.0%	5.7%	1.6%	0.4%

また、【表4】から、事前指導にかける時間が6～10時間、事後指導にかける時間が1～5時間が最も多いことが分かる。本プログラムでは、事前・事後指導を【表5】のように整理し、事前・事後学習を充実させることとした。

【表5 事前・事後指導の考え方】

事前指導	事前学習	体験活動の動機づけや意欲等を高め、学びや体験活動の質を向上させる学習活動。
	直前学習	体験活動を安全に行うために最低限必要な学習活動。(マナー指導等)
体験活動	職場体験	
事後指導	直後学習	体験活動の成果を内面化、共有化させるために、最低限必要な学習活動。(お礼の手紙等)
	事後学習	体験活動の成果を定着化させ、より深化や広がりを持たせる学習活動。

イ これまでの職場体験学習の問題点

これまでの職場体験学習を、【表6】のように整理し、問題点を分析した。

【表6 これまでの職場体験学習】

段階	学習活動	具体的な学習内容	企業との連携
事前指導	テーマの確認	テーマ「職場体験学習を通して、仕事をするために必要な力を考えよう。」 ・各企業を調べる。 ・マナー学習をする。 ・電話で打ち合わせを行い、事前訪問計画を立てる。 ・体験先での活動やインタビューの計画を立てる。	企業決定・依頼
	グループ分け		生徒の事前訪問
職場体験	職場体験	【職場体験】 ・1グループ1～2名。 ・体験内容は、企業任せである。 ・インタビューの時間を設定する。	教師はあいさつと写真撮影
事後指導	体験先の記録のまとめ	・まとめの協議（新聞作成やプレゼン発表）をする。 ・お礼状を作成する。 ・職場体験学習のまとめを新聞や動画・プレゼンテーションソフトを使って作成する。 ・清流祭で発表する。	お礼状の配付・発送
	発表会		

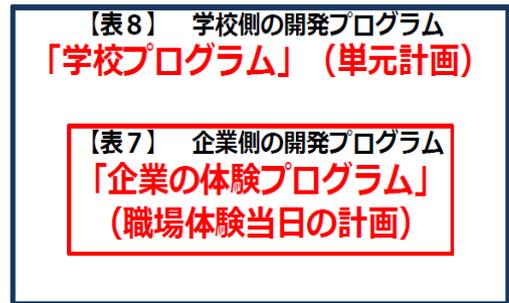
問題点

- 生徒の希望を重視して体験先を割り振るため、第1希望の体験先にならなかった生徒は、スタート時点で意欲が低くなる。
- 受入企業に負担をかけたくないため、「とにかく何でもいいので体験を」と頼んでしまい、生徒の学びに差が出る。
- 1企業あたりの体験者数が少ないため、受入企業が多くなり、教師は生徒の見届けができず、生徒は協働的な学びができない。
- お礼状はしっかり指導されているが、形式的になりがちで、受入企業が最も知りたい「何をどのように学んだのか」という視点が乏しい。

ウ 「発見型職場体験学習プログラム」の開発

これまでの職場体験学習の問題点を改善するために、本プログラムを開発した。職場体験で、仕事の体験だけでなく企業の魅力（社員や職務の価値等）を発見する体験学習なので、「発見型職場体験学習プログラム」と名付けた。このプログラムは2つあり、「学校プログラム」【表8】の中に、「企業の体験プログラム」【表7】がある。イメージすると【図3】のようになる。

【図3 発見型職場体験学習プログラム】



(ア) 「企業の体験プログラム」とは

職場体験当日の計画にあたるもので、特長は次のようになっている。

○ 学校が主体性をもつ。

学校は、育成を目指す資質・能力を企業と共有する。その後、学校が企業の魅力（社員や職務の価値等）を発見するプログラムの基本形（ベース）を示し、企業がそれをもとにプログラムを作成する。

○ 体験内容は生徒が主体的・協働的に行えるように留意する。

単なる体験ではなく、インプット（講話A、体験B、対話C）、業務体験（体験D）、アウトプット（対話E）の流れに留意して、計画する。また、体験先は生徒の希望を重視せず、5人以上のチームで割り振る。

【表7 企業の体験プログラム】

基本形（ベース）			例 電気業		
	1日目	2日目		1日目	2日目
午前	講話A：経営者等より、「経営理念等から企業の魅力」 体験B：「施設見学から企業の魅力」 対話C：若手社員より、「対話から人の魅力」 体験D：「業務体験から人や企業の魅力」 対話E：「企業や人の魅力を発見するためのインタビュー（質問）」		具体的には	○あいさつ	○あいさつ
				○安全教育（講話A）	○若手社員との座談会（対話C）
午後				○会社紹介（講話A）	○各工場見学（体験B）
				○各工場見学（体験B）	○新入社員との座談会（対話C）
午後				○新入社員との座談会（対話C）	○実習（体験D）
				○パソコン実習（体験D）	○振り返り（対話E）
午後				○振り返り（対話E）	○振り返り（対話E）
				○あいさつ	○学習成果発表会（対話E）
午後				○あいさつ	○あいさつ

(イ) 「学校プログラム」とは

単元計画にあたるもので、特長は次のようになっている。

○ 事前・事後指導で「よのなか教室」を開催する。

事前指導の「よのなか教室①」では、生徒が、体験先企業の代表（よのなか先生）へインタビューを行い、職場体験への意欲を上げる。

事後指導の「よのなか教室②」では、受入企業の社員を招き、生徒は職場体験で発見した魅力を短時間で発表した後、体験していない企業の社員と対話を行う。

○ 事後指導における「整理・分析」に重点を置く。

生徒は、職場体験後に、体験で発見した魅力を共有化することで、多くの考え方に触れ、思考を広げ、新たな考えを創り上げる。

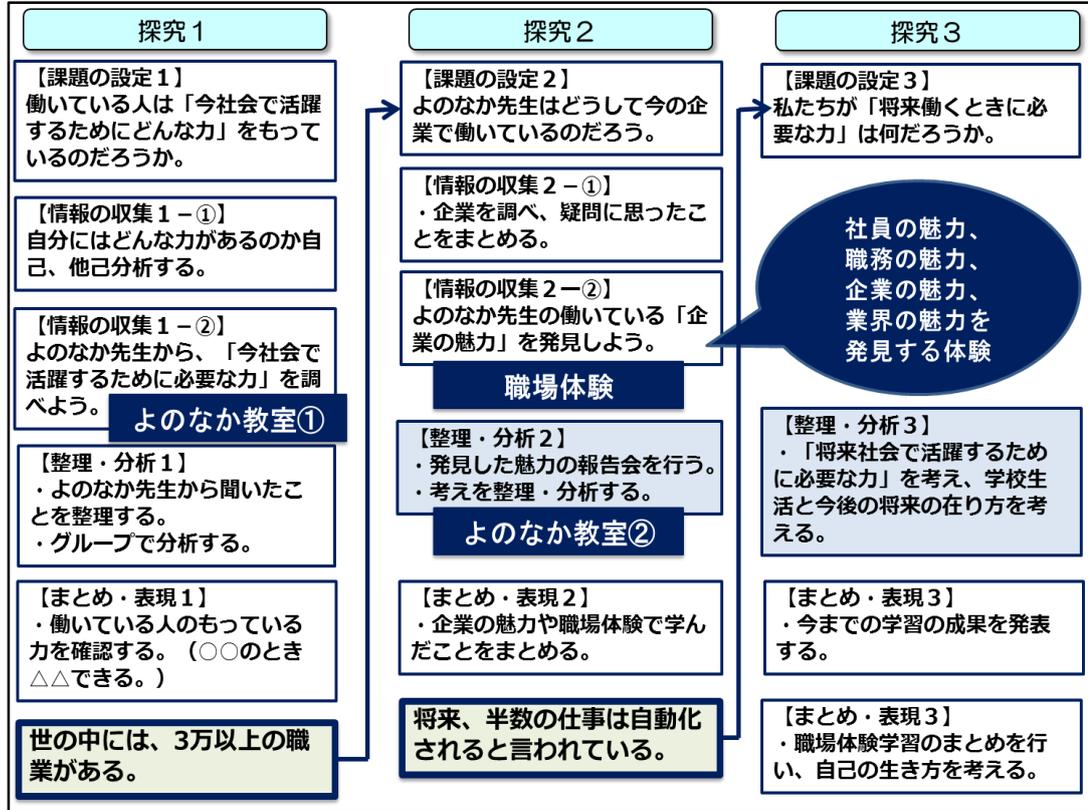
【表8 学校プログラム】

学習プロセス	学習活動	具体的な学習内容	企業との協働
事前指導	事前学習	<p>テーマの設定</p> <p>テーマ「将来社会で活躍するために必要な力を、職場体験学習を通して、探究しよう。」</p> <p>【課題の設定1】</p> <p>探究1「働いている人は、今社会で活躍するためにどんな力をもっているのだろうか。」</p> <p>【情報の収集1】【整理・分析1】【まとめ1】</p> <p>よのなか教室①：よのなか先生ヘインタビュー</p> <p>【課題の設定2】</p> <p>探究2「よのなか先生の働いている企業の魅力を発見しよう。」</p>	<p>企業決定</p> <p>事前協議</p> <p>企業代表（よのなか先生）との対話</p> <p>事後協議</p>
	直前学習	<p>グループ分け</p> <p>体験先での活動計画の作成</p> <p>【情報の収集2】</p> <ul style="list-style-type: none"> 企業を調べる。 「企業の体験プログラム」を提示してもらい、体験先での活動・取材計画を立てる。 マナー学習をする。 	<p>「企業の体験プログラム」の作成</p>
体験活動	職場体験	<p>【情報の収集2】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「企業の体験プログラム」をもとに、職場体験を行い、企業の魅力を発見する。 	<p>教師も一緒に体験・取材</p>
事後指導	事後学習	<p>体験先で発見したことのまとめ</p> <p>【整理・分析2】</p> <ul style="list-style-type: none"> 企業の魅力を整理する。 <p>よのなか教室②：企業の魅力の発表とよのなか先生との対話</p> <p>【まとめ・表現2】</p> <ul style="list-style-type: none"> 企業の魅力をまとめる。 <p>【課題の設定3】</p> <p>探究3「私たちが将来働くときに必要な力は何だろうか。」</p> <p>【情報の収集3】【整理・分析3】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「将来社会で活躍するために必要な力」を考え、「学校生活や今後の将来の在り方」を整理する。 <p>【まとめ・表現3】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今までの学習のまとめ・表現の協議を行う。 お礼状と発表会への招待状の作成をする。 職場体験学習のまとめを動画・プレゼンテーションソフトを使って作成する。 <p>よのなか教室③：清流祭での発表</p> <p>・職場体験学習のまとめを行い、自己の生き方を考える。</p>	<p>企業代表（よのなか先生）との対話</p>
	直後学習	<p>振り返り1</p> <p>発表会</p> <p>振り返り2</p>	<p>発表会への参加</p>

○ 具体的な学習内容を「探究の過程」に位置付ける。

学校プログラムの具体的な学習内容では、①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現の「探究の過程」を明確にする。【図4】のように、探究のスパイラルを意識し、「まとめ・表現」後に、生徒が課題の設定ができるような工夫を行う。

【図4 「学校プログラム」の概要】



2 実践研究

(1) 「発見型職場体験学習プログラム」の実践

ア 指導体制づくり

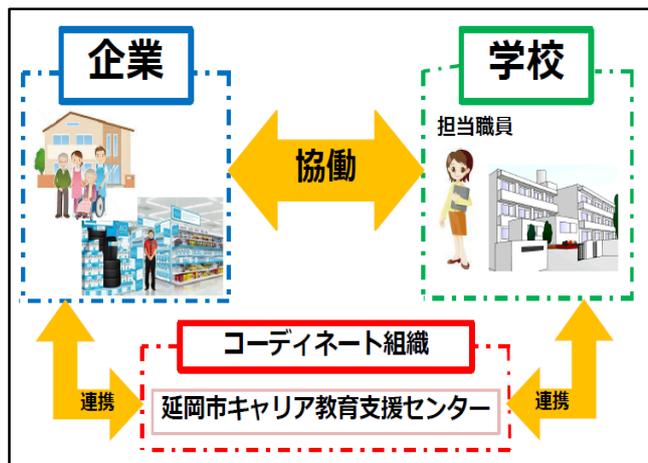
本プログラムは、学校と企業の協働で行うことを目指し、【図5】のような体制づくりを行った。

学校には、コーディネーター的役割を果たす担当職員1名を置き、連絡・調整を行った。そして、延岡市キャリア教育支援センターを介して、指導体制を構築した。

その後に協働で行った実践内容を【表9】に示した。段階2～

4の事前協議は大変有意義で、特に、育成を目指す資質・能力を共有し、本プログラムを共通理解することは、学校と企業の協働において、大変重要であった。

【図5 学校と企業の協働のイメージ図】



【表9 学校と企業の協働の実践内容】

段階	時期	参加者	場所	内容
1	5月 下旬	校長・教頭 第2学年職員	学校	・「発見型職場体験学習プログラム」の検討 ・体験先企業の選定
2	6月 月上旬	校長・教頭 第2学年職員 <small>延岡市キャリア教育支援センター</small>	学校	●「発見型職場体験学習プログラム」の説明、協議 ・体験先企業の選定 ・体験先企業の依頼方法の検討
3	7月 月上旬	校長・教頭 第2学年職員 体験先企業 <small>延岡市キャリア教育支援センター</small>	学校	●「学校プログラム」の説明、協議 ・「よのなか教室①」の実施 ・「よのなか教室①」の事後の協議
4	8月 月上旬	第2学年職員 体験先企業 <small>延岡市キャリア教育支援センター</small>	<small>延岡市キャリア教育支援センター</small>	●企業向け研修会の実施 ・「企業の体験プログラム」の作成
5	9月 月上旬	体験先企業 第2学年職員	体験先企業	・職場体験の実施
6	9月 月上旬	第2学年職員 体験先企業	学校	・「よのなか教室②」の実施 ・アンケートの配付
7	10月 月中旬	第2学年職員 体験先企業	学校	・「よのなか教室③」の実施

協働的な実践の効果

学校は、担当職員が中心となって、延岡市キャリア教育支援センターを活用することで、企業と連絡・調整を行う支援等を受けることができるようになった。

○ **段階1**

学校は、育成を目指す資質・能力や本プログラム等を十分に検討することで、教師間で共通認識することができた。

○ **段階2**

学校は、延岡市キャリア教育支援センターに、本プログラムの理解を得ることができたことで、受入企業の情報提供があり、本プログラムに則した企業を選定することができた。

○ **段階3**

「よのなか教室①」の実施日に、学校が、企業と育成を目指す資質・能力（主体性・協働性）の共有を図り、「学校プログラム」の理解を得ることができたことで、その後の「よのなか教室①」の目的を確認し、役割分担等を行って臨むことができた。

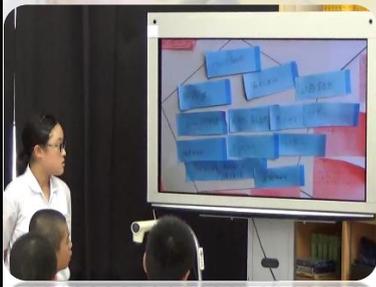
○ **段階4**

企業が、学校職員と一緒に、「企業の体験プログラム」の作成を行ったことで、学校の意見も反映できた。

イ 指導の実際

(7) 事前指導【情報の収集1】：よのなか教室①

生徒は、体験先企業の代表（よのなか先生）の「今社会で活躍するために必要な力」を調べた。

学習内容と生徒の様子	
	<p>1 よのなか先生へのインタビュー</p> <p>生徒は、よのなか先生に3つの質問（仕事で良かったこと・つらかったこと・中学生に戻ってもこの仕事をするか）を行い、そのエピソードを要約して、付箋に書きこんでいった。よのなか先生の仕事に対する思いを引き出そうと生徒の主体的な姿が見られた。</p>
	<p>2 グループでの協働</p> <p>生徒は、グループで、「今社会で活躍するために必要な力」を、協力して導き出した。その際、生徒が持ち寄った付箋をもとに、共通する力を探す活動として行った。生徒の協働的な姿が見られた。</p>
	<p>3 全体共有</p> <p>グループの生徒代表が、根拠をもとに、導き出した内容を発表した。生徒の意見は、「コミュニケーション力」や「協力する力」などが出された。よのなか先生のお客様への対応から導き出された力で、他の発表を聞いて、多くの生徒がうなずいていた。</p>
	<p>4 よのなか先生のまとめ</p> <p>よのなか先生は、「他者を思いやる心が大切なのではないか」と話された。そして、「このよのなか教室だけでは分からないところを職場体験で見つけよう。」とあったことから、生徒の職場体験の意欲付けになった。</p>

指導の工夫した点とその結果	
工夫	結果
○ よのなか先生へのインタビューでは、質問を3つに絞らせる。	○ 生徒は、よのなか先生から、必要な情報を充分得ることができた。
○ グループ活動で、思考ツール（コアマトリックス）を用いる。	○ 生徒は、自分の考え、グループの考えが可視化され、協働的な活動となった。
○ 事前協議で、よのなか先生に、職場体験につながるようなまとめを依頼する。	○ 生徒の職場体験への意欲付けにつながった。

(4) 職場体験【情報の収集2】

生徒は、「企業の体験プログラム」をもとに職場体験を行い、企業の魅力を探した。

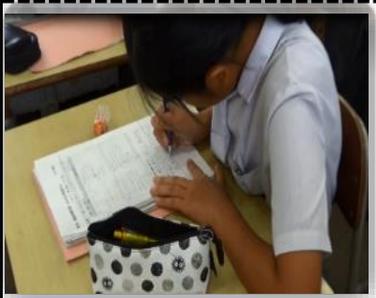
学習内容と生徒の様子	
	<p>1 店長の講話（小売業）</p> <p>店長は、企業の大事にしていること（経営理念等）を話したことで、生徒は、接客する上で大切なことや身に付けるべき力を理解した。そして、生徒は、「お客様第一の考え方」や「お客様への礼儀」、「共通認識の在り方」などの社員や職務の魅力を見つけた。</p>
	<p>2 施設見学（電気業）</p> <p>施設見学で、生徒は、社員の働いている様子を見たり、設備の説明を聞いたりして、「仕事の幅が広い」などの職務の魅力を探そうとする姿が見られた。その後、社員の方へのインタビューで、生徒は、施設見学で気づいたことなどを積極的に質問していた。</p>
	<p>3 新入社員や若手社員との座談会（電気業）</p> <p>中学生にとって身近な存在である新入社員や若手社員の中には、所属校の卒業生もおり、和やかな雰囲気の中、話が進んだ。生徒は、「地域の暮らしに貢献できる」など、企業の魅力を次々に引き出した。</p>
	<p>4 業務体験（福祉業）</p> <p>家庭的な雰囲気の施設の中で、生徒は、入所者さんと会話やカルタをしたり、施設内の飾りづけや調理活動を行ったりした。そのような人に直接関わる体験から、「自分の家のような空間」や「人の温かさ」を企業や社員の魅力として感じた。</p>
	<p>5 インタビュー（ホテル業）</p> <p>生徒は、施設見学や業務体験を通して、疑問に思ったことなどを社員の方に質問した。例えば、「地域に根ざしていくホテルにするために具体的に取り組んでいることは何か。」などで、この活動から、業界の魅力を見つけていた。</p>

企業の工夫した点とその結果	
工夫	結果
○ 育成を目指す資質・能力や本プログラムを共有した上で、職場体験を実施する。	○ どの企業でも、生徒が企業の魅力を見つけた。

指導の工夫した点とその結果	
工夫	結果
○ 教師は、職場体験に同行し、体験内容を把握することで、事後指導に生かす。	○ 生徒の事後学習が、教師の適切な指導で、充実した。

(ウ) 事後指導【整理・分析2】：よのなか教室②

生徒は、発見した魅力の発表とよのなか先生との対話を行い、企業の魅力を整理した。

学習内容と生徒の様子	
	<p>1 企業の魅力の報告会</p> <p>生徒は、グループで協力して、発見した企業の魅力を5つのキーワード（ホテル業では、「全てを行えるホテル」や「地域に根ざしていくホテル」等）にしぼり、画像を使って説明した。その際、全ての生徒が発表し、充実感や達成感を味わうことができていた。</p>
	<p>2 よのなか先生との対話</p> <p>生徒は、報告会を受け、自分で選んで、職場体験をしていない企業のよのなか先生と対話を行った。そして、知りたい情報を直接よのなか先生に質問したり、学校生活のことを質問されたりすることで、働くことと学ぶことを結びつけている生徒の姿が見られた。</p>
	<p>3 振り返り</p> <p>授業の最後には、生徒は、個人で、企業の魅力を整理し、まとめた。様々な企業の方の話と関連付けながら、自分なりに整理することができていた。職場体験の学びを深めることができていた。</p>

指導の工夫した点とその結果	
工夫	結果
<p>○ 企業の魅力の発表を、1グループ2分程度（1人15秒程度）にする。</p>	<p>○ 全ての生徒が発表でき、その内容は簡潔で分かりやすいものであった。</p>
<p>○ 生徒が対話する相手を、自分で2回選んで行く。</p>	<p>○ よのなか教室①と比べて、生徒は、自ら知りたい情報を得ようとしていた。</p>
<p>○ 振り返りは、企業の魅力をまとめるだけでなく、自分ごととして考えるように書かせる。</p>	<p>○ 生徒は、働くことへの学びを深めることになった。</p>

(エ) 事後指導【まとめ・表現3】：清流祭での発表

生徒は、本プログラムで学んだことをまとめ、清流祭で発表した。

学習内容と生徒の様子	
	<p>1 企業の魅力を発表</p> <p>生徒は、映像の中で、企業の魅力を、一人ずつキーワードを使って説明した。よのなか教室②の発表より分かりやすくするために、職場体験の状況を数枚の写真や文字で表し、イメージをしやすいようにした。</p>



2 対話

生徒は、インタビューをする人とインタビューをされる人(企業の魅力を発表したグループ)に分かれた。製菓業では、「企業の1%＝お客様の100%はどういう意味か。」に対して、「企業にとっては100個のうち1個の失敗がお客様にとっては100%の失敗である。」という対話形式で発表した。



3 「学校生活や今後の将来の在り方」を宣言

学級全員で、学習面、生活面、行事面、部活動の4つの項目に分け宣言した。「自分から進んでできること見つけて行動したり、一人では難しいことを周り協力したりする」など、将来社会で活躍するために必要な力と関連付けた内容となった。

指導の工夫した点とその結果	
工夫	結果
○ 本プログラムの「まとめ・表現」の段階で、企業の魅力や対話を発表する。	○ P3-4にある「収集した情報を取捨選択し、視点を決めて分析し論理的にまとめる力」が目指せた。
○ 「〇〇のとき△△できる」という形で、学校生活や今後の将来の在り方について宣言する。	○ 生徒は、探究の結果として表現することができ、その内容をその後の生活で意識することができた。

(2) 考察

キャリア教育において、生徒が自らの学習活動の過程や成果を振り返ることは重要である。そのようなことから、本研究では、生徒の成長や変容に関する評価を、アンケートや振り返りの結果、生徒の学習成果物で考察した。

ア 生徒の「学びに向かう力・人間性」について

(7) 「基礎的・汎用的能力」アンケート結果

生徒の実態や変容を、以下の方法で調査した。

- **対象** : 所属校の中学2年生(26名)
- **調査内容** : 生徒が「基礎的・汎用的能力」アンケートを自己評価
【表10】の中学校キャリア教育の手引き(平成23年3月)の「キャリア教育アンケート」の一例を参考
- **調査時期** : 年度始め、職場体験直後、本プログラム実践の最後
- **指標** : ③の項目で「協働性」、④⑥の項目で「主体性」を検証

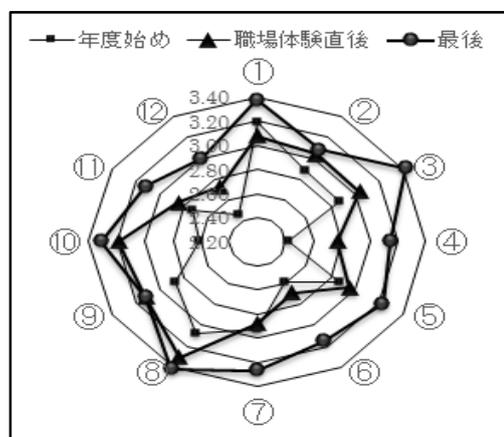
【表 10 「基礎的・汎用的能力」アンケート】

NO	項 目	基礎的・汎用的能力
①	友達や家の人の意見を聞く時、その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか。	人間関係形成・社会形成
②	相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。	
③	自分から役割や仕事を見つけたり、分担したりしながら、周囲と力を合わせて行動しようとしていますか。	
④	自分の興味や関心、長所などについて、把握しようとしていますか。	自己理解・自己管理
⑤	気持ちが沈んでいる時や、あまりやる気が起きない物事に対する時でも、自分がすべきことには取り組もうとしていますか。	
⑥	不得意なことや苦手なことでも、自ら進んで取り組もうとしていますか。	
⑦	わからないことやもっと知りたいことがある時、自分から進んで資料や情報を収集したり、だれかに質問をしたりしていますか。	課題対応
⑧	何か問題が起きた時、次に同じような問題が起こらないようにするために、何をすればよいか考えていますか。	
⑨	何かをする時、見通しをもって計画的にすすめたり、そのやり方などについて改善を図ったりしていますか。	
⑩	学ぶことや働くことの意義について考えたり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。	プランニング
⑪	自分の将来について具体的な目標を立て、その実現のための方法について考えていますか。	
⑫	自分の将来の目標に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか。	

4：いつもしている 3：時々している 2：あまりしていない 1：ほとんどしていない

【グラフ1】は、項目ごとの全生徒の平均値を比較したもので、最後には、調査した全ての項目の平均値が上昇していた。このことから、本プログラムの実践によって、生徒の「基礎的・汎用的能力」の自己評価が上がり、自己肯定感が高まったと考えられる。

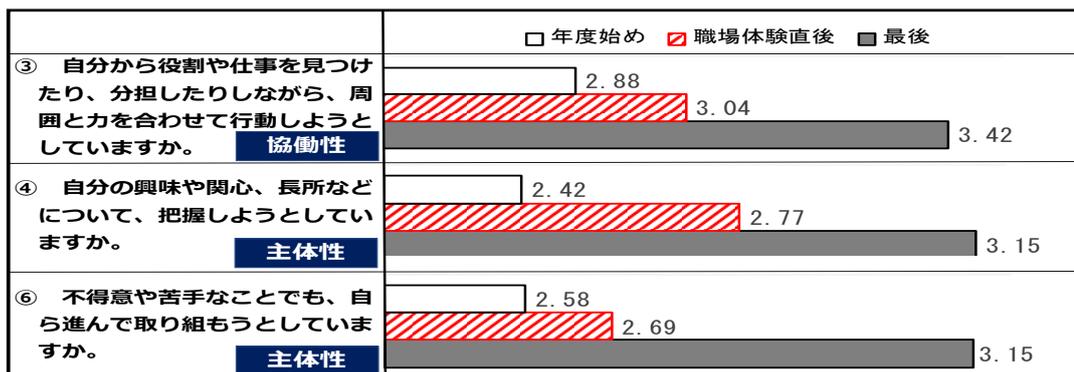
【グラフ1 【表10】のアンケート結果】



(イ) 生徒の「主体性・協働性」

次の【グラフ2】は、【表10】の指標としてあげた③の「協働性」、④⑥の「主体性」の結果である。アンケートの全生徒の平均値はすべてにおいて上昇していた。

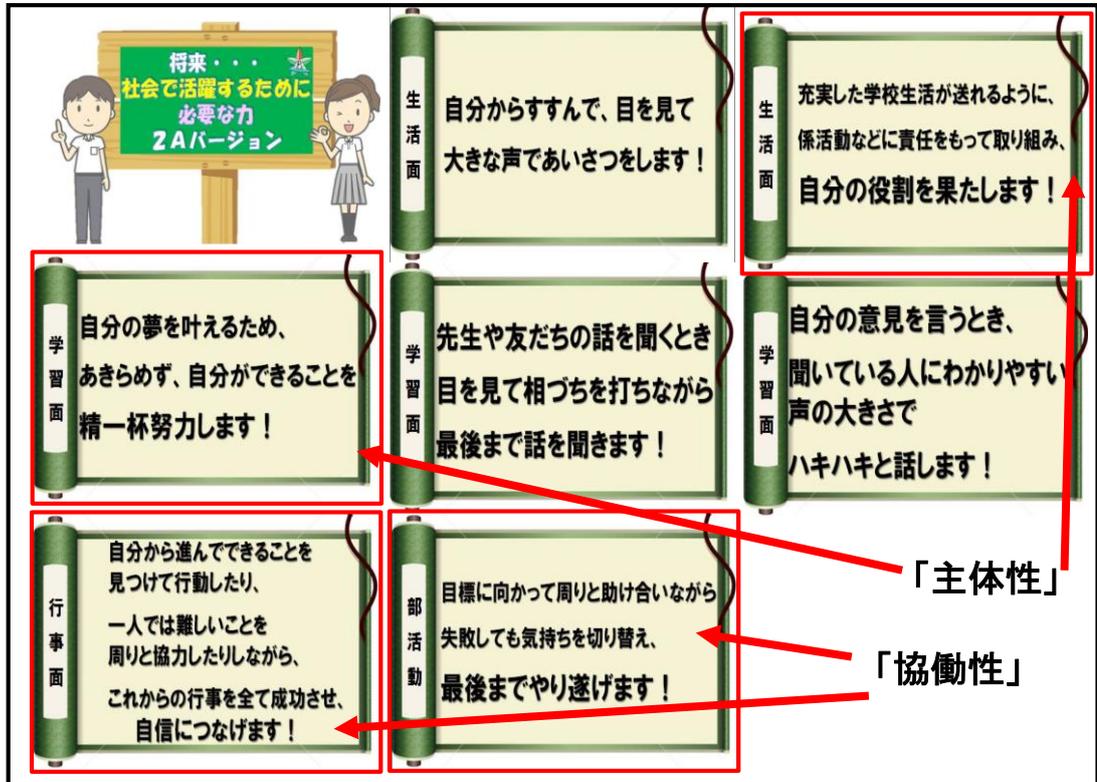
【グラフ2 全生徒の平均値の推移】



(ウ) 「学校生活や今後の将来の在り方」の結果

次の【資料1】は、清流祭で宣言した内容である。生徒たちの探究の結果として、「主体性・協働性」に関わる言葉が出てきた。

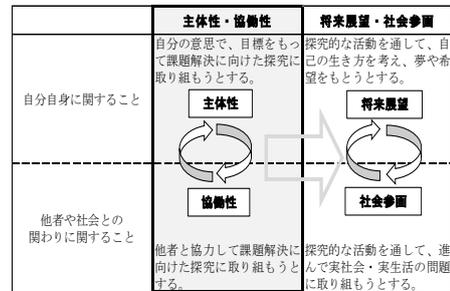
【資料1 「学校生活や今後の将来の在り方」の内容】



「学びに向かう力・人間性（主体性・協働性）」について

○ 探究的な学習で(イ)、(ウ)の結果が得られたことから、「主体性・協働性」が育成されたと考えられる。また、「主体性・協働性」に焦点化して研究を進めたが、(7)の結果を得られたことで、本プログラムがキャリア教育全般にわたって有効な手段であることが言える。

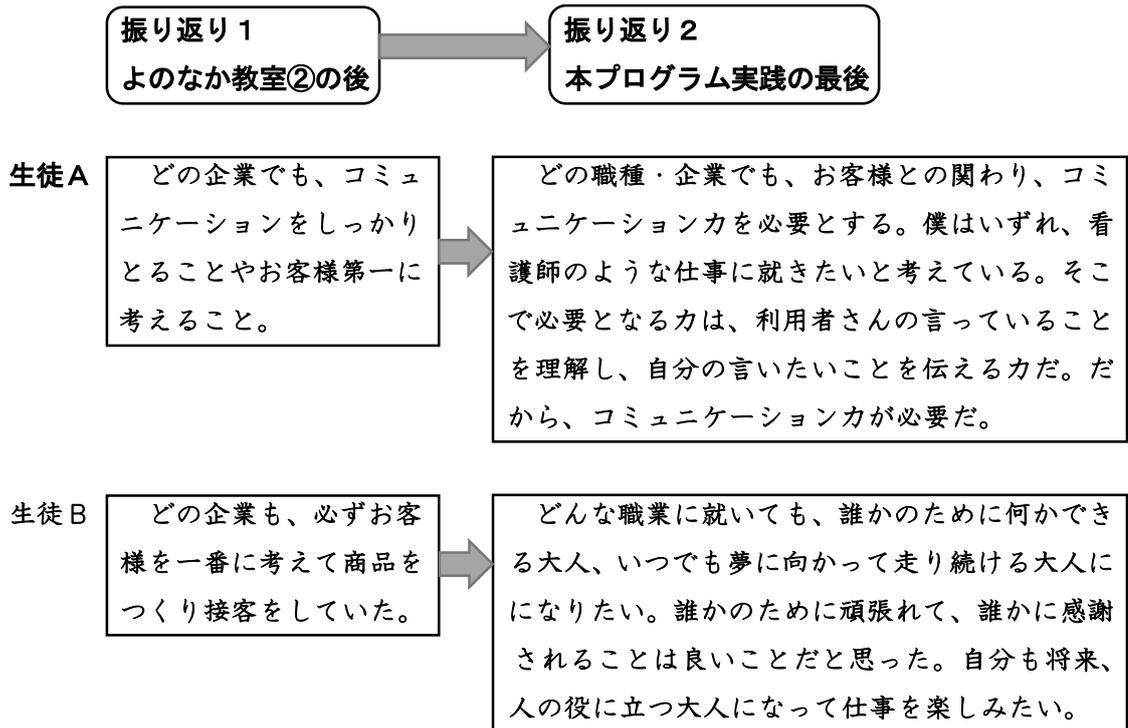
○ この結果は、本プログラムの中で、多くの大人と関わったことが、向上につながったと考えられる。職場体験だけでなく、よのなか教室①で職場体験への意欲付けがあったことや、よのなか教室②で対話から働くことへの学びを深めることができたからではないかと考える。また、思考ツールの活用や、よのなか先生との関わり方を工夫するなどの学習活動に、効果があったと考えられる。



(イ) 生徒の学びの「振り返り」の結果

生徒の「振り返り」の変容を【資料2】に示した。振り返り1の企業の魅力から、振り返り2の将来社会で活躍するために必要な力を、生徒は次のように考えた。生徒Aは、将来就きたい仕事のために必要な力を分析している。生徒Bは、将来の目指す自分像を明確にすることができている。

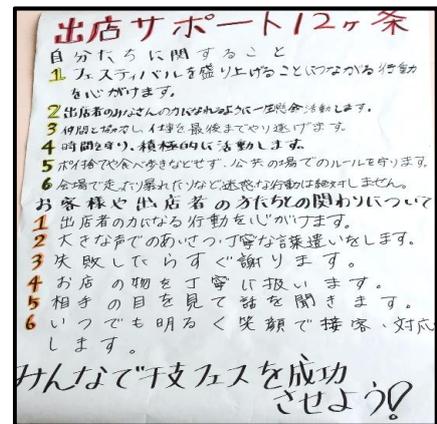
【資料2 生徒の学びの「振り返り」】



(カ) 「発見型職場体験学習プログラム」の実践後の生徒の変容

本研究の対象外にはなるが、本プログラムの有効性を示す生徒の変容が、次のように見られた。本プログラムの実践後に、生徒は、新たな課題を設定した。そして、毎年行われている地域イベント（お祭り）に出店されている方々の販売サポートの体験において、中学2年生が、【資料3】を作成した。その内容は、【資料1】が活かされたもので、「自分たちに関すること」「お客様や出店者の方たちとの関わりについて」に分けられた。当日は、全校生徒で意識し、グループで協力してお客様を呼び込む姿などが見られた。

【資料3 出店サポート12ヶ条】



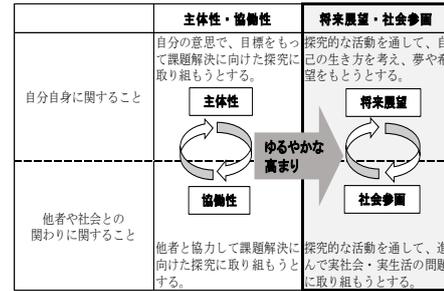
また、以下のような、地域イベント後の「振り返り」が見られた。

生徒C：今回のサポート体験では、「相手に伝える力」、「お客様に積極的に宣伝する力」を意識した。笑顔で明るく声をかけると、「頑張っているね。」と言ってくれて嬉しかった。

生徒D：高齢者クラブの方々のサポートをすることになった。職場体験の福祉施設での体験を生かした。また、イベントのステージを高齢者の方々と一緒に見ていて思ったことは、様々な年代の人に見てもらうために、内容や出店テントの位置を変えたほうが良いこと等あり、来年提案してみたい。

「学びに向かう力・人間性（将来展望・社会参画）」について

- (ウ)、(エ)の内容と生徒が自分ごととして振り返りや清流祭で発表する様子から、「将来展望」が高まったと考えられる。それは、本プログラムで、多くの大人と接し、協働的に、働くことの意味を考えるようになったからではないかと考える。



- (オ)の本プログラムの実践後の生徒の変

容から、「社会参画」も高まったと考えられる。昨年度まで、地域イベントでは、教師から注意事項を説明していたが、今回は、生徒自ら「出店サポート12ヶ条」を提案した。本プログラムで、探究のサイクルを繰り返したことで、プログラムが終了した後も、生徒自ら新たな課題を設定し、実社会の問題に取り組み、自己有用感も味わうことができたからではないかと考える。

以上のことから、本プログラムの実践が、【図2】の生徒の「学びに向かう力・人間性」の育成につながったと言える。

イ 「発見型職場体験学習プログラム」について

(7) 「発見型職場体験学習プログラム」による改善について

これまでの職場体験学習の問題点で、本プログラムで改善できた点を【表11】のように考えた。

【表11 職場体験学習の改善点】

これまでの職場体験学習	「発見型職場体験学習プログラム」の実践	
	改善点	効果
● スタート時点での生徒の意欲が低い。	○ 「探究の過程」に位置付けた。	○ 生徒が主体的に課題の設定を行い、意欲が上がった。
● 体験内容は企業任せで、生徒の学びに差が出る。	○ 体験先は、生徒の希望を重視せずに、教師が全て割り振った。	○ 生徒は、スタート時点で、職場体験から何を学ぶのかを理解していたので、どの企業の生徒も、意欲が低下しなかった。
● 職場体験で、教師は生徒の見届けができず、生徒は協働的な学びができない。	○ 学校が、「企業の体験プログラム」の基本形を示し、「よのなか教室②」で、体験していない企業の方と対話を行った。	○ 職場体験の内容に差がなくなり、生徒は、他の企業の情報も得ることができた。
● お礼状が形式的になりがちである。	○ 5人以上のグループ編成をし、受入企業を減らした。	○ 教師は、生徒の活動を見届けることができた。
	○ 生徒のグループ分けでは、1グループ5人以上にした。	○ 生徒は、協働的な取組を行うことができた。
	○ 「企業の体験プログラム」が、企業の魅力を発見する内容だった。	○ 生徒は、何を学んだかを明確にしたお礼状を書くことができた。
	○ 「よのなか教室②③」を開催した。	○ 受入企業は、生徒の学びを得ることができた。

(イ) 学校と企業の協働について

本プログラムについて、企業へアンケートをとったところ、以下のような回答を得られた。

- 企業A**：よのなか教室に臨むにあたって、改めて自社について考える機会となった。
- 企業B**：よのなか教室や職場体験では、私自身が話をする機会が多くあり、話すことに自信がついた。また、よのなか教室②の発表会では、私が伝えたいことが伝わっていたと実感できた。
- 企業C**：自社アピールの場面もあり、大変ありがたかった。同時に、他社の経営について勉強になった。
- 企業D**：プログラムが新しい取組で、最初は成果に疑問をもったが、生徒の成長と一緒に感じることができ、素晴らしい取組だった。ぜひ、広げてほしい。

学校と企業の協働的な指導体制の構築について

本プログラムは、学校と企業の協働的な指導体制を構築するのに、企業の回答をもとに、以下の理由から、有効なプログラムであると考えます。

- 本プログラムは、学校だけでなく企業にとってもメリットがあったと言える。特に、企業A、Bは、企業の人材育成になっており、企業Cは自社の経営をアピールできた。よって、学校と企業の win-win の関係が構築できたと考えられる。
- 企業の理解と協力を得て、本プログラムの実践を継続させていくには、企業Dのように、生徒の成長や行動変容を、企業も一緒に感じることができるようになることが大事なのではないかと考える。

ウ 生徒の「働く理由」について

【表12】は、本プログラムの最初、職場体験直後、本プログラムの実践の最後のアンケート3回分の結果であり、全生徒の理由の多いものから順位をつけ並べたものである。

【表12 生徒の「働く理由」のアンケート結果（複数回答あり）】

	最初	職場体験直後	最後
1位	お金のため (23人)	お金のため (8人)	人の役に立つため (15人)
2位	生きるため 生活するため	自分のため (力を発揮するため) (やりがいのため)	自分のため (力を発揮・高めるため) (やりがいのため) (目標を達成するため) (成長するため)
3位	社会のため	生きるため 生活するため	生きるため 生活するため
4位	家族のため	社会のため	社会に貢献するため
5位	人のため (4人)	人の役に立つため (4人)	お金のため (2人)

生徒の「働く理由」について

本プログラムの実践において、生徒は、企業の魅力を発見する職場体験で、大人がお客様（誰か）のために仕事をしている姿を見て、実際に業務を体験することができた。そのような直接的な体験によって、生徒の「働く理由」は、自己中心的な考え方から社会貢献的な考え方に大きく変化し、働くことの意味を探究できたのではないかと考える。

Ⅸ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- 「発見型職場体験学習プログラム」は、生徒の「基礎的・汎用的能力」の自己評価が上がり、「振り返り」の変容から、総合的な学習の時間における「学びに向かう力・人間性」の育成に有効であると言える。
- 「発見型職場体験学習プログラム」は、これまでの「職場体験学習」の問題点を改善し、学校と企業が協働的な指導體制を構築する有効な手段であると言える。
- 「発見型職場体験学習プログラム」は、生徒の「働く理由」のアンケート結果から、キャリア教育に関わる探究課題として、適していると言える。

2 今後の課題

- 「発見型職場体験学習プログラム」は教科横断の視点を取り入れる必要がある。特に、キャリア教育では、特別活動を要とした取組の研究も進めていく必要がある。
- 「発見型職場体験学習プログラム」の実践を継続させるためにも、延岡市キャリア教育支援センターの協力を得ながらも、現在の体制を学校で実現していく必要がある。

参考・引用文献等

- 「中学校学習指導要領」 (平成 29 年 3 月 文部科学省)
- 「中学校学習指導要領 解説 総合的な学習の時間編」 (平成 29 年 7 月 文部科学省)
- 「中学校学習指導要領 解説 特別活動編」 (平成 29 年 7 月 文部科学省)
- 「中学校キャリア教育の手引き」 (平成 23 年 3 月 文部科学省)
- 「キャリア教育」資料集—文部科学省・国立教育政策研究所—研究・報告書・手引編
(平成 28 年 5 月 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター)
- 平成 29 年版中学校新学習指導要領の展開 総合的な学習
(平成 29 年 11 月 田村学編著 明治図書)
- 学校と企業と地域をつなぐ 新時代のキャリア教育
(平成 29 年 5 月 長田徹・清川卓二・翁長有希 編著 東京書籍)
- 授業を磨く (平成 27 年 4 月 田村学著 東洋館出版社)

《研究実践校》 延岡市立北方学園中学校

《研究協力団体》 宮崎県キャリア教育支援センター・延岡市キャリア教育支援センター